

京都大学農学部総合館周辺 埋蔵文化財発掘調査の概要

昭和48年9月

発掘調査担当者

京都大学文学部助手	中村徹也
京都大学大学院文学研究科博士課程	岡内三真
京都大学大学院文学研究科修士課程	中村友博
京都大学大学院文学研究科修士課程	泉拓良

I. 調査の経過

本調査は、京都大学北部構内農学部総合館のうち、林学科・農業工学科・農林経済学科研究棟（以下「南棟」と呼ぶ）建設に付帯する諸管埋設工事に先立つ事前調査および立会い調査である（第1図）。

京都大学では47年11月の理学部事務棟建設予定地域の発掘調査を皮切りに、北部構内においてなされるすべての掘鑿^{さく}工事を対象として、工事地域内の埋蔵文化財の発掘調査をおこなうとともに、本調査に先行して新しく北部構内全域にわたる等高線測量図を作成した。これにより、建設計画に先立って埋蔵文化財の分布状況ならびにその密度を予知する計画的な調査をおこなうための基本的姿勢とデータが整ってきたのである。

南棟建設にともない予定される諸管埋設に必要な最小の面積は延べ約600㎡である。配管路線は、污水管、ガス管、電気ケーブル、給水管、電話線である。そのうち理学部正門から北へ走る電話線^{さく}については、立会い調査にとどめた。各管の工事用掘鑿溝をそのまま調査用トレンチに設定し、つぎの二つに調査目的を置いた。

1. トレンチ内における遺構ならびに遺物の検出。

2. 地層観察による北部構内地下の旧地形の復元。

これらは今回の事前調査の結果を基にして「建築計画に先立つ埋蔵文化財の分布調査」のための基礎資料を蓄積しようとするものであった。

調査関係の要領はつぎの通りである。

調査対象地 京都市左京区北白川追分町
京都大学北部構内農学部総合館南棟周辺

調査主体者 京都大学 総長 前 田 敏 男

調査指導者 京都大学文学部講師

小 林 行 雄

調査担当者 京都大学文学部助手

中 村 徹 也

同大学院文学研究科

博士課程2年 岡 内 三 真

修士課程 2 年 中 村 友 博
修士課程 1 年 泉 拓 良
調査協力者 京都大学農学部学生，院生
京都大学農学部事務室
京都大学施設部
調 査 期 間 昭和 4 8 年 2 月 7 日～4 月 1 0 日
調 査 面 積 約 6 0 0 m^2

なお，地層および旧地形の復元について理学部石田志朗助教授に，出土した獣骨について同池田次郎教授に御指導をお願いした。

調査は大きくわけてつぎの 3 カ所におよぶ（第 2 図）。

- a. 今出川通りより農学部正門を入り，農学部本館玄関に至る幅 1.5 m，長さ 145 m の
トレンチ（トレンチ番号 I）。
 - b. 農学部総合館南棟周辺の 8 本のトレンチ。幅 1.5 m，長さ延べ 280 m（トレンチ番号
A，B，C，D，E，F，G，H）。
 - c. 数理解析研究所および，基礎物理学研究所前の 6 カ所のテストピット（3 m×1.5 m）。
- 調査結果を a，b について概略する。

a. I トレンチ

〔層位〕

今出川通りから農学部正門に至る南北道路西寄りの車道上に，歩道に沿って幅 1.5 m，南北 145 m におよぶトレンチを設定。これに先立って約 25 m 間隔に，門外に 3 カ所，門内に 3 カ所のテストピットを掘る。テストピットによる試察にもとづき，門外は道路面下約 3 m，門内では同約 0.6～0.7 m までユンボを作動させることにする。この長いトレンチの地層観察の結果は，門の付近を境として南北で大きく変化している。

門より南の層位は概ね道路面下約 0.6～0.7 m に水田床土の粘土質ベルトが走っており，それより下方は約 2 m におよぶ白川砂層ないし白川の運んだ大小の礫の層が互層をなす状態を示していた。それよりも更に下層には黄褐色粘土の水平層がある。水成層とおぼしく遺物の包含はみられない。したがって門より南の状況は，比較的新しい白川の造扇状地活動の堆積状況

を物語っているだけで、遺構はまったく存在しない。

門より北へ向うにつれて地層が安定してくる。概ね道路面下0.5～0.6 mの深さに水田の床土である粘土質の青灰色ベルトが走り、その直下から約1.2～1.5 mの歴史時代遺物包含層が始まる。この層は基本的にはつぎの三つの層位にわけられる。

最上層はやや砂質の赤褐色土層の堆積である。灯明皿等中世の遺物を包含する（中世層）。

その下方の比較的良くしまった暗褐色土層は平安時代各期の土器および瓦片を多く包含する（平安層）。最下層は黒色砂質土層で、遺物は非常に少ないが、後で述べる奈良時代初期の土器を包含する（奈良・黒土層）。

これら歴史時代3層の堆積しているさらに下方に接して、白川の運んだ厚い黄色の砂層がみえる。砂層の厚さは平均して1.3 m位で南へ向うほど厚くなり、門の北では2.5 mにも達する。この門より北方の砂層は、門より南の比較的白っぽいコース・サンド（coarse sand）に比べ、色も汚れた黄色で、ミドル・サンド（middle sand）である。それは一見して北の砂層が南の砂層より古い堆積であることを示している。

門より北の3カ所に掘ったテストピットでは、いずれも道路面下約5 mに達して厚い礫層に当る。この間砂層下に8層の層序が観察された（図版Ⅱの2）。これらの各層は基本的には、ファイン・サンド（fine sand）、ミドル・サンド、コース・サンドおよび礫層の互層であり、北白川扇状地のできてゆくさまを示すものである。そのうちの白川砂層下第2層目に当る黒色粘質砂層は、晩期縄文式土器片を包含する。したがって厚い白川砂の堆積層をはさんで上部の3層が歴史時代、下部に先史時代の包含層が存在し、この砂層が調査過程において標準の層位となりうるようになった。

門内の北側約5 m位にわたって層序の断絶がみとめられる。北方から続く古い白川砂層および歴史時代の各層が、南の白川砂層によって断たれている。新古の砂層が直接に接しているという状態である。したがって中世以降の比較的新しい時期に白川の流れが農学部正門辺りを東から西へ向って流れ、それがやや北方へ向って屈曲する攻撃面にあたる河崖であろうと推定される。

〔遺構〕

門より南では、包含層および遺構はまったく検出されなかった。

門より北ではまず、床土を除去した赤褐色土上面に矩形の掘り方をもつ円柱の掘建て柱が数

個検出された。掘り方の一辺20cm，円柱の径8～10cmで，中に入り込んだ土からみて，水田として整地される直前の近世ないし明治期のものと推測される。性格は不明で，残存状態が悪く建築物としてまとまりえない。

つぎに遺構が検出されるのは，黄色砂層の上面である。黄色砂層を切りこんで直上の黒色砂質土層が落ちこんだ状態で溝状の遺構があらわれる（図版Ⅲ－2）。トレンチ西壁へ向って入り込む「コ」字形を呈している。溝の幅50cm，深さ20～30cmで，南北辺の長さ5.5mを測る。溝中にはほとんど遺物が発見されなかったが唯一，溝の南辺角近くに甕が一個完形で発見された。遺物の項で述べるが，奈良時代初期の土師器の甕であった。一見して住居址の周溝状にみえるため南辺を追って西へトレンチを拡張したところ「ロ」字形にめぐると思われた溝は，西にゆくにつれて北方へ屈曲し，結果としては方形プランにまとまる様相を示さなかった。したがって溝の性格も判然としないまま，将来の周辺地の調査の機会を待つこととした。しかし溝中の黒色土が奈良時代と判断する資料となったことは収穫といえる。

b. 農学部周辺諸管理設用の8本のトレンチ

〔層位〕

旧建造物および南棟建設工事によって表土下約0.5～1.0mにわたり攪乱をうけ破壊されていた。しかし前述した門内北方のトレンチ内の安定した層序がこれらのトレンチでも同様に観察された。ただ奈良黒土層が西へゆくにつれて非常に薄くなり，破壊をこおむらない場所では，平安層が明確に3分できた。

とくにその中間層からは，皇朝十二銭の1つ「延喜通宝」が発見され，ほぼ絶対年代を与えうる層として指標となった（第3図）（図版Ⅱの1）。

〔遺構〕

8本のトレンチとも遺構らしい遺構はほとんどなく，わずかに小さな不整形のピット状の落ちこみ，あるいは不規則に走る溝状のものにとどまる（図版Ⅲ－1）。歴史時代各層の下方には，古い白川黄砂の堆積がみられ，Aトレンチ内のテストピットでは砂層下に縄文式土器を包含する粘質砂層の存在もみとめられた。各トレンチとも東方から流れて堆積した層が遺物包含層となっており，これから推すと，縄文式土器，歴史時代土器および瓦を有する遺構の存在地

域を東方の京大理学部植物園付近に想定する可能性が強まった。

Ⅱ. 出土遺物について

整理が完了していないので、品目と簡単な説明にとどめる（図版参照）。

〔土器〕

①奈良時代の甕（図版Ⅲ－２）

遺構を伴わない包含層採集の遺物が大部分を占めているうちで唯一、遺構らしき黒色土溝中より出土。奈良時代初期の土師器の甕一個体。完形の甕であったが土圧によりひしがれて割れている。器高約30cm縦長で薄手の器壁の内外は丁寧なハケ目調整が施こされ、さらに胴部より底部にいたるまではヘラで削られた調整痕がみられる。近江を中心に分布の拡がりをもつ甕とされている。

②平安層出土の須恵器片多数（図版Ⅳ－１・２　Ⅴ－１）

器種は、杯、蓋、盤、壺、甕、平瓶など。完形のものではなく、復元可能なものも非常に少ない。ほとんどが流されてローリングをうけた様子で磨滅している。総じて胎土の色は黒っぽく、焼きは良好。

③平安層出土の土師器片多数（図版Ⅵ－１・２）

器種は、皿、杯、高杯、盤、灯明皿など。特に「延喜通宝」をともしう平安中間層出土の皿が目される。皿は非常に薄手で口縁部のつくりの特徴があり、平安期の土器編年の上に形式的資料を与えるものとして意義深い。

④青磁片、灰釉陶器、施釉陶器（緑釉）等少々。器種は、碗、壺など。復元不可能。

〔貨銭〕（図版Ⅴ－２）

「延喜通宝」4枚。Dトレンチで3枚（うち1枚は大破）、Fトレンチで1枚。すべて平安層より出土。層序および伴出土器に年代を与えるものとして貴重な資料となった。

〔瓦類〕（図版Ⅶ～Ⅺ）

A～Hの各トレンチから数多く出土しているが、これも完形のものではなくほとんどが破片である。大部分が平安層から出土している。ここでは軒先瓦についてのみ概略を記すことにする。軒先瓦片はその大部分がDトレンチで出土し、これに平行したAトレンチおよびIトレンチ北方でもわずかにみられた。軒平瓦、軒丸瓦合わせて11種類。うち軒平瓦8種、軒丸瓦3種であ

る。瓦の文様と造りから推定する年代は、平安時代中期から末期に至るものまでみられ、その一部は鎌倉期のものと区別しがたい。

栗栖野瓦屋産系のものと、小野瓦屋産のものが明確に判別できる。特に単弁8個をめぐらす軒丸瓦（型式番号KU7120）には小野瓦屋産を示す「小乃」の文字が見え（図版Ⅷ-1），これと一对をなす軒平瓦（型式番号KU7570）も出土している（図版Ⅷ-2）。文字瓦には他にかつて平安宮大内裏より出土した例のある均正唐草文軒平瓦（型式番号KU7545）があり、文様の中心に「上」という文字が読みとれる（図版Ⅶ）。この瓦に「上」という文字を読み得たのは今回の出土瓦が初めてである。平安後・末期の瓦には、これまでも鳥羽南殿、法金剛院、六勝寺、仁和寺などで発見されているものと同範あるいは同種のものがみられる。

Ⅲ. 結 語

今回の調査の結果、各トレンチ内において性格の判明する遺構の存在がほとんど検出されなかった。しかし土器および瓦類の破片はかなりの量におよんだ。特に10世紀から12世紀に至る時期の瓦片がかなり多く発見されたことは、この地の近辺に平安時代を通じての寺院址の存在する可能性の強いことを示している。平安期の官窯である小野瓦屋や栗栖野瓦屋産の瓦がこの地で発見されること、文献史料に寺院の存在が見出せないことなどは、今回の調査の示した大きな問題提議である。

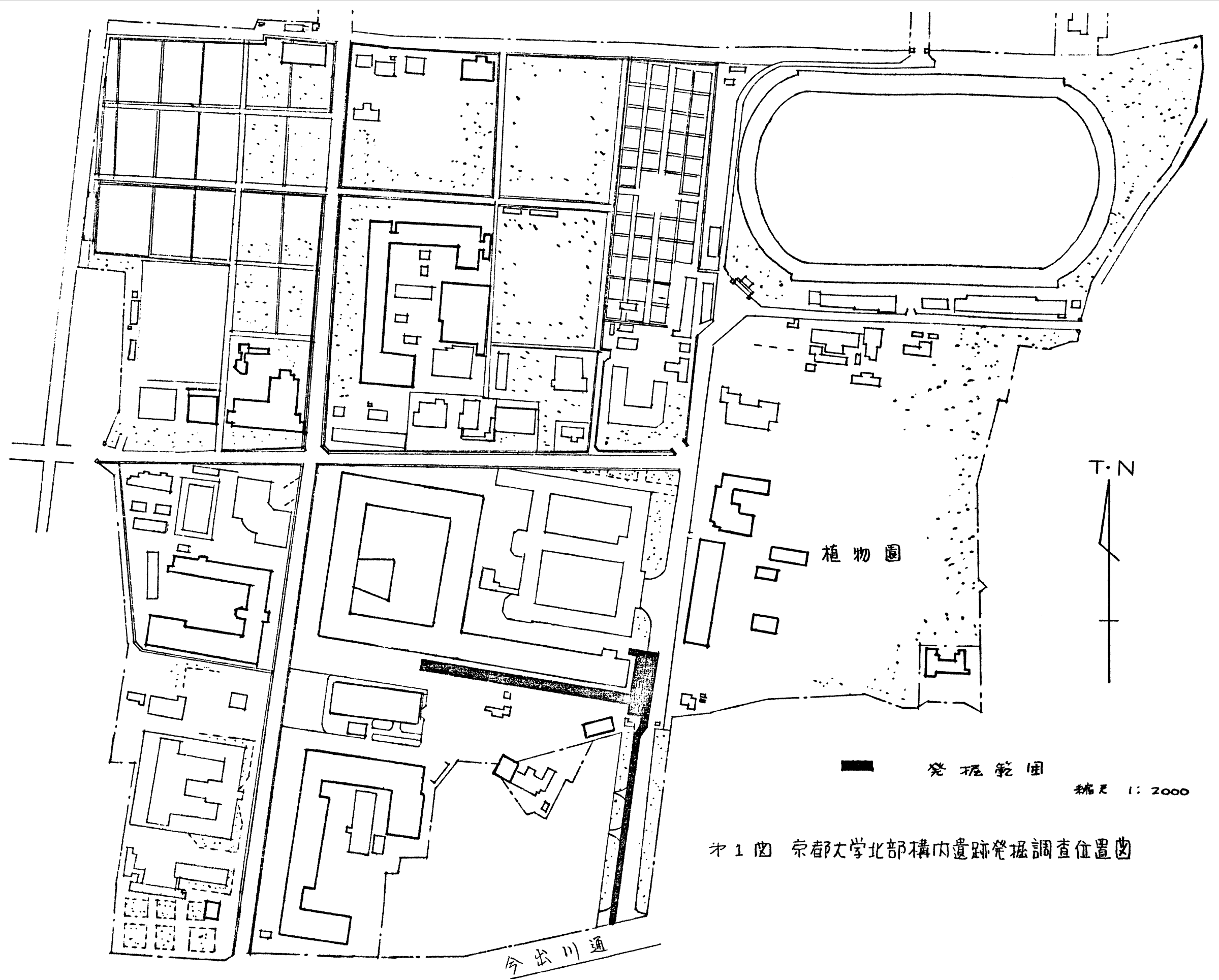
また「延喜通宝」と伴出した土器類を基とする平安時代土器研究にとっては大きな資料を提供するものでもあった。これらの瓦および土器については、今後の京大構内の各所の発掘調査よりえられるであろう資料の増加を待つてまとめてゆくつもりである。

北白川扇状地の復元作業は、大まかな推測ではあるが、北部構内の遺跡との関連で少しずつ可能になってきた。地質学教室の応援をえて、歴史的環境の復元を行ってゆきたいと考えている。

尚、基礎物理学研究所前のテストピットは、各トレンチで観察された層位とまったく同質であり、詳細を略すが、下方に縄文式土器の包含層が明確にみられ、遺物も採集された。理学部中央道路上の立合い調査では遺構及び遺物の存在はみられなかった。

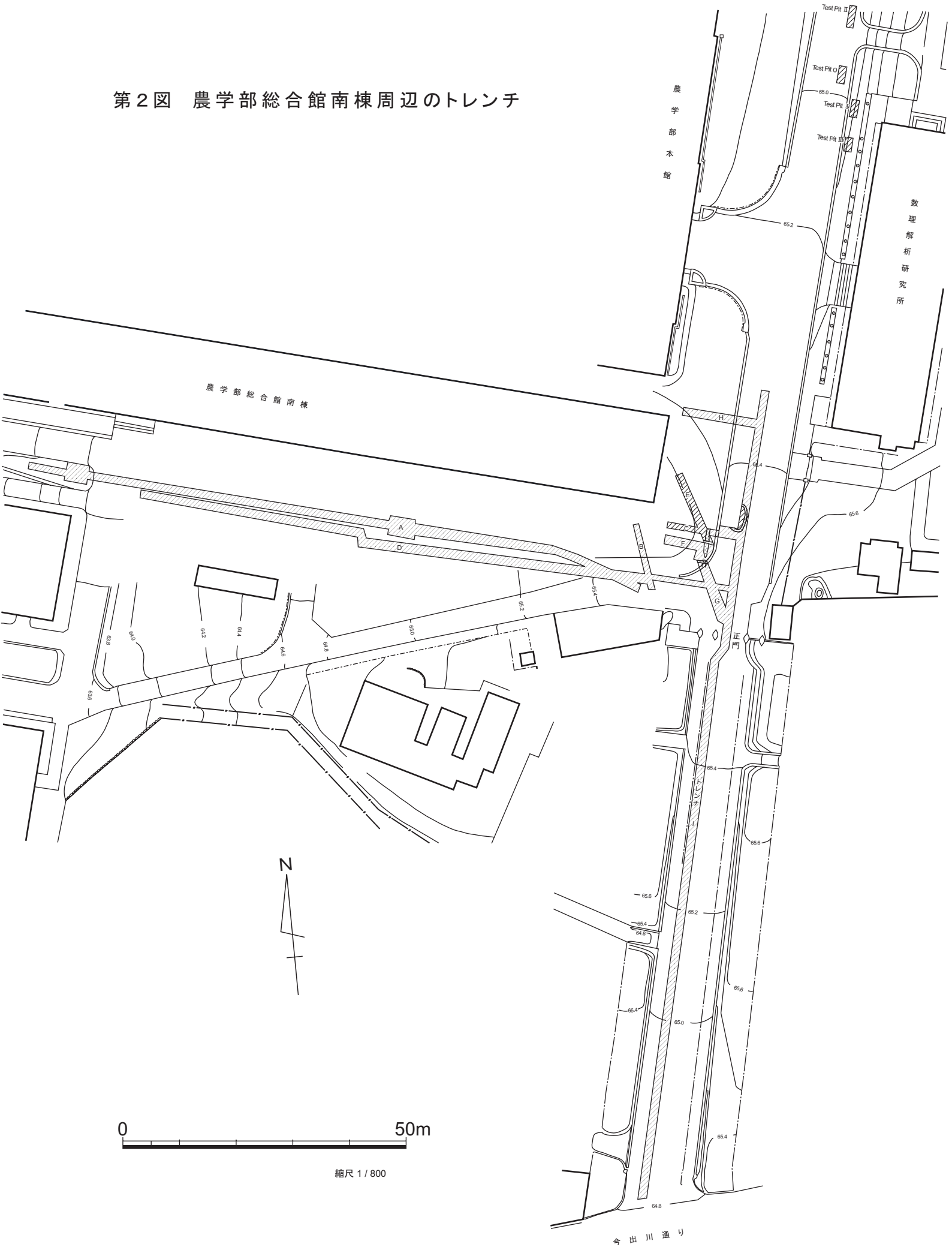
图

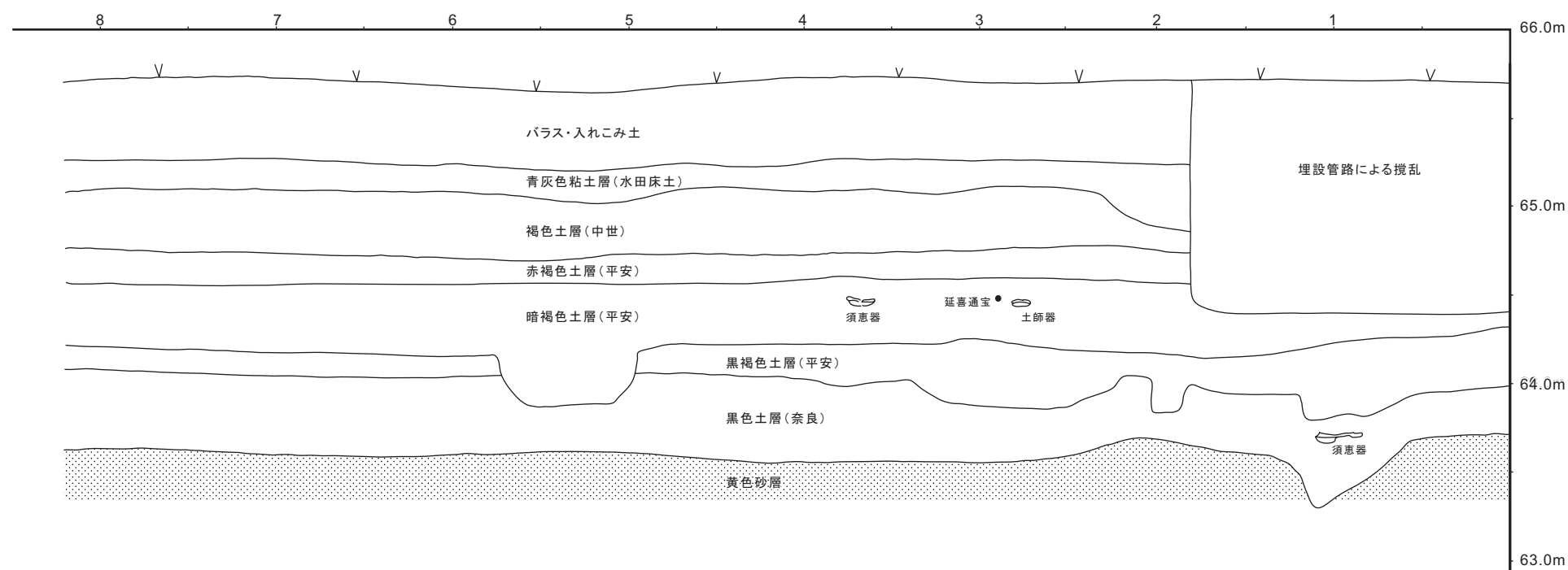
版



才 1 図 京都大学北部構内遺跡発掘調査位置図

第2図 農学部総合館南棟周辺のトレンチ

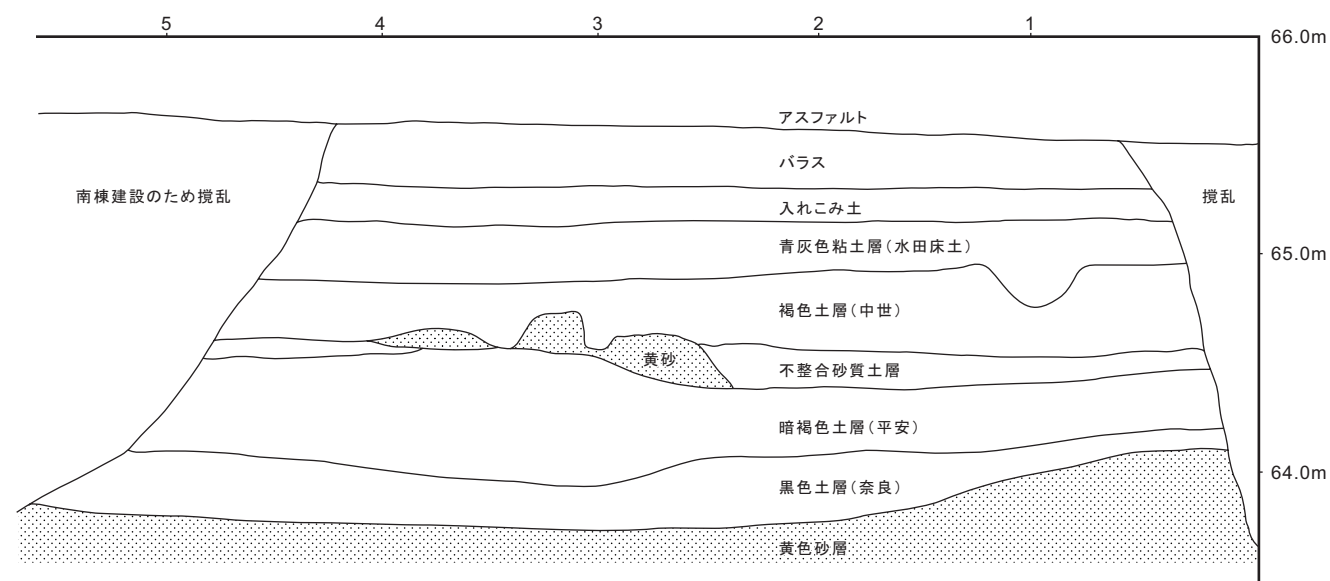




第3図 地層断面図

(上) Fトレンチ北壁
(下) Bトレンチ東壁

縮尺 1 / 35

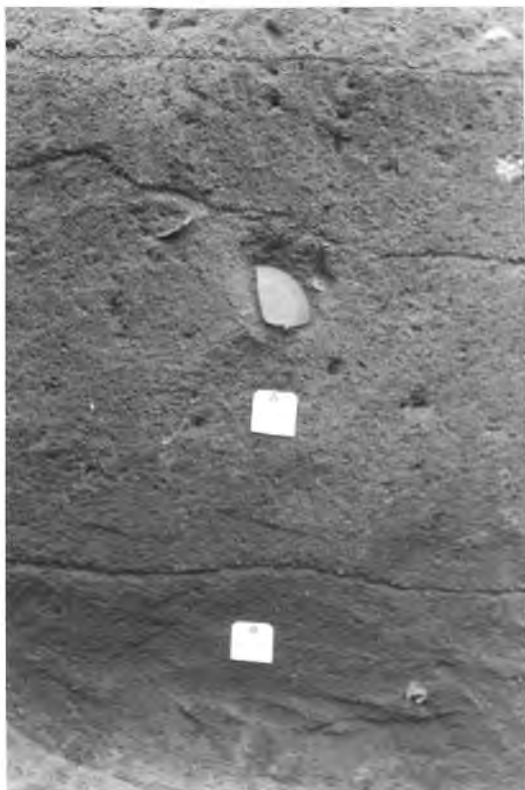




1 トレンチ内発掘調査作業 E, F トレンチ



2 トレンチ内発掘調査作業 D トレンチ



1. 「延喜通宝」，土器の
出土する平安層 Fト
レンチ



2. テストピット内地層
南北道路トレンチ



1. 平安層遺物出土状況
Dトレンチ



2. 南北道路Ⅰトレンチ内
奈良時代溝状遺構および
甕出土状況



1. 平安層出土の須恵器，蓋



2. 平安層出土の須恵器，杯



1. 平安層出土の須恵器，杯



2. 「延喜通宝」(A D . 907 年)



1. 平安層出土の土師器，皿・灯明皿



2. 平安層出土の土師器，皿



均正唐草文軒平瓦 「上」文字 (KU7545)



1. 単弁蓮華文軒丸瓦・「小」文字 (KU 7120)



2. 均正唐草文軒平瓦 1 と一対をなす (KU 7570)



1. 均正唐草文軒平瓦 (KU 7540)



2. 均正唐草文軒平瓦 (KU 7585)



1. 複弁蓮華文軒丸瓦 (KU 7130)



2. 扁行唐草文軒平瓦 (KU 7760)



1. 三巴文軒丸瓦 (KU 7320)



2. 均正唐草文軒平瓦 (KU 7770)